

## ブラームス / ハイドンの主題による変奏曲 Op.56a

作曲家と研究者、つまり音楽を生み出す人と研究する人は、ともすると正反対の立場だと思われがちだが、作曲家のなかにも、研究者顔負けの学究肌の人がある。その代表格が、ヨハネス・ブラームス（1833-1897）である。ルネサンスやバロックの音楽を研究し、楽譜の校訂にも携わった。その背景には、19世紀後半のドイツでバッハ協会が設立され、(旧) バッハ全集の刊行が進むなど、音楽学が盛んになり始めたこともあった。そうしたなか、ブラームスはウィーン楽友協会のライブラリアン（楽譜管理者）で、ハイドン研究者でもあったカール・フェルディナント・ポール（1819-1887）と知り合った。彼から当時ハイドンの作とされていたディヴェルティメント集の楽譜を見せてもらったブラームスは、その中の1曲、「聖アントニウスのコラール」に心をひかれた。やがてウィーン楽友協会の音楽監督に就任したブラームスは、1873年、その主題をもとに「ハイドンの主題による変奏曲」を作曲した。最新の研究では、ハイドンの作品ではないという説が有力だが、この作品が古典への敬意から生まれたことに変わりはない。曲は、主題と8つの変奏、そして終曲からなる。終曲はバロック時代に流行した変奏曲の一種、パッサカリアの形式で書かれている。変奏曲の主題を支えるバス（低音）の5小節を基本に、変奏がおこなわれる。

遠山 菜穂美

※掲載された曲目解説の無断転載、転写、複写を禁じます。

### 楽器編成

フルート 2（ピッコロ持ち替え 1）、オーボエ 2、クラリネット 2、ファゴット 2、コントラ・ファゴット、ホルン 4、トランペット 2、ティンパニ、トライアングル、弦五部

※スコア上の表記